『海』第二十九号の作品について

『海』のホームページには、「ニュース」のコラムを設け、『海』の作品に対していただいた批評や感想などの内容の要旨を掲載し、同人個々の参考になるようにしています。

第二十九号（通巻第九十六号）の作品に対しお寄せいただいた感想などの一部（抄）を、左記に掲載させていただきます。

ご意見をいただいた各位（お名前は略）に、心から感謝申し上げます。

◇エッセイの部

上水敬由「やなぎかげ」

・山頭火、球磨焼酎の話に興味を抱いた。

◇詩の部

笹原由理「ことし　ほか」

・悲しみがまっすぐに伝わってきて、胸に刺さった。

群　青「八月の砂地」

・心の機微を、易しい言葉で歌いあげている。

・心に残る詩である。

・この詩人の人柄に魅かれる。

◇散文詩の部

牧草　泉「愛するあなたへ」

・一独身女性の感覚がわかったような気がする。

・登場する作家名は、アルファベットでない方がよくはないか。

◇俳句の部

松本西夏「風は誰」

・心に残る句が数点ある。

・しっとりと、しかも枯れた感じがいい。

◇評論の部

赤木健介「犯罪と二人の批評家」

・昨今、こういうテーマの作品をみない。

・とても参考になった。

◇小説の部

高岡啓次郎「冷たい夏」

・安定した筆遣いで、読ませる。

・読んで身につまされた。・・男のかなしさ。孤独。書くということ・・。

・ミステリアスな展開に、独自性を感じる。

・ヘルパーの裏にもつ毒を、さらりと出したところがよい。

有森信二「グッド・ラック」

・意欲作であるが、書き足りない。

・若い感受性を表に出したところと、老獪な政治問題を持ち込んだところがうまくさばけていない。

・主人公の影が薄く、エンディングが決まらなかった。

井本元義「白羊の虚囚夢」

・まさに、純文学の世界。

・文体の魔術が、草花の根の触手のように伸びてきて、脳髄を侵していく。

・スケールの大きい幻想的な冒険譚であり、想像力を駆使した力作である。

・この異能の作家が、正当な評価を受ける日を待ち望む。

◇招待席の部

天津孔雀「蝶　愛する少年」（散文詩）、「こんにちは」（掌編小説）

・興味を惹かれた。

・独特の美学を感じた。

◇『海』全体の部

・充実した力のある作品が揃っている。

・活力と持続力がすばらしい。

（まとめ・U）